音譜
獨吟

新作琵琶歌

始

特100
153

音譜
獨吟

新作琵琶歌

大正
3. 1. 13
内交

○曲譜の符號と吟者の心得

地　は上中下の三段あれど吟者の地聲と知るべし

○　大干にて吟者の能ふだけの大聲

、　中干とて大干と地聲の間

△　棒讀にして力ある聲之をくづれと稱す

一　地聲にて起り謠ひ切る之を切りと云ふ

×　中干切り中干にて起り謠ひ切る

●　艶をつけて吟ずる之を吟替り

新作琵琶歌目次

明治天皇…（照日の葵凋落れて）……一
乃木將軍…（壯烈宇内に震駭し）……九
旅順口…（皇の稜威輝く光に）……一四
吁兩中尉…（雲か霞か將た花か）……一八
國の御柱…（港川流れの水のいと清き）……二三
殿中刄傷…（塵もゆるがず靜かなる）……二七
橘大隊長…（奥大將の許にあり）……三〇
河内の宿…（散るを習ひの櫻井の）……三四
風雅の大高…（何のその岩をも貫す梓弓）……三七

富士の裾野…（雲井に聳ゆる富士の嶺の）……四一
櫻井の訣別…（世は浮雲のゆきかひて）……四五
山科の哀別…（倶不戴天の君の仇）……四七
吉野の落…（美吉野の花も龍田の紅葉ばも）……五〇
此一戰…（明治三十餘り八歳の）……五五
譽の德利…（錦に勝る赤合羽）……五八
母の誠…（木の葉皆身にしむ）……六二
小松の操…（忠孝文武兼ね備へ）……六五
四條畷…（時しも御代は正平の）……六七
彰義隊…（住にし馴れし大江戸の）……七一
送別…（茜さす我が日の本に）……七六
和強…（和光は塵の神の道）……七七
小敦盛…（祇園精舎の鐘の聲）……八〇
太田道灌…（頃は彌生の末つ方）……一〇二
日本海々戰…（頃は明治三十八の年）……一〇三
松嚏…（新玉の年立ち歸る）……一〇五
春日野…（春日野の下萌へ出づる）……一〇八
國船…（雲に聳へし高山も）……一一一
小督…（頃しも秋の半の空）……一一三
吹雪の敵…（力山を拔き氣世を蓋ふ）……一一八

威海衛…（名も高き渤海灣の）……一二四
迷語もどき…（世の中は迷ふが故に）……一二九
狂女…（人間の世の有樣を）……一三一
那須野與市…（四國八島の荒磯の）……一三四
辨内侍…（哀れや落花情あるを）……一四二
月花…（月と花とは昔より）……一五〇
蓬萊山…（目出たやな君が惠は）……一五二

——（目次終）——

新作琵琶歌

渡邊華水曲譜
田邊春波編纂

明治天皇

地ノ中　徳川の流れ漸次に濁り來つ、照日の葵うら枯れて、置露滋く霜冴ゆる、」中干　秋風颯々天高く、輝く旭雲はれて、大干　時の將軍慶喜は、畏こみ恐れ太政を、奉還なして日月の、錦の御旗てりまさり。

綾に畏こき大稜威、 地ノ上 普天の下率土の濱、達かぬ隈はなかりけり」

中干 時維れ慶應丁の卯、春未だ寒き三の歳、月の肇めはむつ月に、

孝明天皇第二の皇子睦仁親王殿下には、 地 皇考の御大志をば、寶算

漸く二八にて御繼紹あらせられ、御踐祚の大典擧げさせ給ひ、 大干 無

窮の鴻德允武の御英姿を、仰ぎまゐらす芽出度さに、亂れそめにし

刈菰の世の動亂も鎭まりて、 中干 皇祖の御敎は治國平、大盤石に國

の礎固めんと、 地上 いとゝ畏こき御誓文、下し給ひし五ヶ條の、

詔をば蒼生は、拜誦するこそ幸の極みと言ふべけれ」 中切 茲に明

治と改元の御宇改まる秋津洲、王政復古の御大業、緒につきたまひ、

中干 皇恩四海に洽ねく聖德異邦に及ぼして、洪範宇內にたれさせ給

ひ、

古の文見るたびに思ふかな

己が治むる國はいかにと

地 明らけく治まる御代も央ばなる、 中干 二十三年庚寅、國會開設の

御敕ありて、六千萬のたみぐさの福趾を圖らせ給ひ、地ノ變 民安かれと倚るべの道理、智嚢啓發まなびの徑、勸め玉へる教育の御敕語をば下し給はりぬ、地下 扨ても光陰矢の如く、甲午の歳は二十七、鷄の林に風たちて、隣交遂ひに隙生り、止むなく動ぐ日の御旗、無人の境を行く如く、戈干に膺懲す清國の、臺灣島を割かしめつ、日帝國の新版圖、地 幾もなくして遼東の、空を南に翔け下る、中干 いと恐ろしき荒鷲は、鋭き爪や猛き嘴、心のまゝに振舞ひて、大干 東洋

平和を搔き亂す、傍若無人の露西亞國、地 我皇は時の有司を遣はして、いと懇に諭させ給へども、勇武にはやり横暴の露人の頑夢醒めやらず、暴虐飽くこと知らざれば、大干 東洋平和維持のため、股肱の蒼生に大詔、地上 下したまへば滿洲の胡砂吹く風の荒野原、進む兵士幾師團、血河屍山の其中に、東西戰史に比類なき、屢大捷獲給ひて宇内に國威を發揮せり、地 大英國と同盟の誓ひの固めなし給ひ、内治倍々整ひ外威愈々震ふ、寔に御偉業を誌しまつらば限り

はあらじ、然れば國民人はいふもさら、海の外なる異邦の、中千 人
とし人は一樣に、聖壽無窮を祈り奉りし縡のなまよみの、地 玉の宮
居の甍には、妖しの雲は漠々と、日月ために光なく、中千 明治は末
の四十五年、文月二十日突として、陛下御惱と漏れ傳はれば、大千 海
内の蒼生あなやと斗り愕然と自失茫乎に、地下 暫し果しはあらざり
しが、されど斯くてはならじと蒼生は、恰ら喋し合ふごとく、吟替 此
處の神祇、彼處の佛閣と、祈願參籠一心に御惱に代ゆる我命、地中 御

平癒禱らぬ者こそなかりける」地上 殊に皇城の廣苑の御前に集ふ老
若の、男女貴賤の差別なく、皆一齊に額づきて、中千 苦熱に肉體こ
がせども、毛髮火炎と化すれども、身動ぎもせぬ熱禱は、假や此塲
に玉の緒の斷えなば絶えよ、皇の御惱うすらぎ給はれと、迸り出す
赤誠は、乾坤ために搖げども、神靈天を急がせ給ひ、大千 其月末の
三十日、中千 國母陛下を始め奉り、下六千萬の蒼生が縋りまつれど
中切 衰龍の御袖拂ひて哀しくも龍駕御登遐あらせらる」地變 身も代

もあらぬ悲哀みに、億兆ひとしく鰭伏して暫が程は慟哭に、　大千　山嶽震ひ流水歇り、世は諒闇の神寂びて、天地寂漠聲もなし」　地ノ下　思ひ廻せばうつゝ世は、哀しき絆のかづあれど、之にましたる悲哀は、我一代によもあらじ、　中千　君の齢の永かれと祈れる其掌は今はしも遙かに拜す桃山の御空にむかひぬかづきて、　切　朝な夕なに御遺業を慕ひ奉るぞ哀しけれ、したひまつるぞ悲しけれ

乃木大將

地上　壯烈宇内を震駭し、道義は世界の範となり、至誠は人を動かせる、　大千　陸軍大將乃木將希典は、神去り在まし先帝の、靈轜に扈從し奉つる君に殉せし物語、　中切　春夏秋冬四つの緒を調べの絃にかけまくも、綾に畏こき玉の宮居に雲生る、　地　時しも明治四十五年文月の中旬過る頃、　大千　聖壽無窮と祈りてし、　地　大帝の玉體は、苟且のつゝがと斗り思ひきや、重き御惱と漏れ承はりし將軍は、あなやと

斗り愕きて、焦心悶々寝食を忘るゝことも屢々に、夙夜齊戒沐浴し

中干 天神地祇に禱りつゝ、殊恩に生ける老骨の命に換へて大君の御

惱癒させ給へよと、熱き祈の効もなく、地ノ 九五に在ます龍體はあ

へなく天に陞らせ給ひ、大干 愁雲八紘を鎖して風傷み、落日荒涼

うたゝ暗憺たり」地 此時決せし將軍が、心の奥の秘め事は甚麼なる

人だにしらま弓、吟替 彎けばかへらぬ武夫の心の裡を譬へなば嵐の

前の櫻花

人生自レ古誰無レ死 留取丹心照二汗青一

地 扨ても去る程に翔ける金烏にやすみなく、走せる玉兎の足はやみ

御代大正と改まり菊月中の三日には、大干 綾にかしこき大帝、殯の

宮をいでまして、哀しや登遐の御首途、世は諒闇の夕まぐれ、愁雲濃

く九重の大内山の常盤木にかゝるも憂しや秋の月、露したゝらん斗

りにて、風にゆら〳〵遠近の、路をてらせる篝火も今し消えなむ哀

の極、調べは細く哀しくも亦た嚴かに奏でゆく」地下 此時にしも將

軍は豫めて我家の一室に齋き祀れる聖天子、明治天皇御眞影の御前に、

地中　威儀嚴然と瞑目し心に念じ申されけるは、臣はこれ西南の戰役に、軍旗を敵に奪はれし、責は死すべき命をも、機を失ひ思はずも、春秋こゝにつもり來て、頭には霜を戴き髭白く、過ぎし旅順△△△△の激戰は雨と降り來る彈丸の下、果つべかりにし老の身の我は殘り△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△て面のあたり、地ノ變末頼母しき殿原に屍に代へし凱旋、思ひまうけぬ現し世を生き長らへて、皇恩に報ひまつらん折なくて、中切　今將

×××××××××××××××××××××××た悲し大君の、龍駕昇天を拜し奉る、あはれ此期を逸しなば、臣の死すべき處なし」地ノ變　さあれ學びの窓の戸に畏れみ冊づきまゐらせし、皇孫殿下の御光、いとも貴ふとき御將來、拜しまゐらせたらんには、兒等に別れし老が身の、甚麽に嬉しきことならむ、兎やせん角やと波たてる、心二つに身は一つ、中干　遒がに猛き武夫も、情には脆きものなるよ、地上　折りもあれや青山に、轟きわたる砲の音、大干　これぞ殯の宮をいでましの相圖と知るや將軍は

うつし世を神去りましゝ大君の
御跡したひて我はゆくなり

地 一首の和歌を名殘とし、肌寛ろげて籠釣べ水もたまらぬ一刀を、
莞爾と笑みて拔き放ち、 中切 腹搔き切つて千早振る、神の帝に殉じ
×××××××××××
たる、誠忠無比の赤心は、寔に國民の龜鑑なり、 切 寔に蒼生の鑑なり
××

旅順口

地 皇の稜威輝く御光に、枯れ〳〵 切 伏せる滿韓の草木もなどか

大干 生さらん、醜凝りに凝る露とても、 中干 いかで朝日に消えざら
ん、去る程に 地 日露の交渉破れしかば、忝くも畏くも 地ノ變 開戰の
詔をぞ下し給ふ、茲に海軍中將東郷平八郎と聞えしは、 大干 海に
名を得し武士にて、朝日初瀨を初とし山を見違ふ艨艟に、朝汐白雲
霞など、 大干 はやり切つたる勇敢の水雷艇より成立てる十六隻の艦
隊を、率ゐて舳艫相啣み旅順を指て進みける、 地 それ敵軍の要害は
背後に堅固の砲臺あり、前には東洋艦隊の力をすぐり集めたる、多

くの軍艦おしならび、港狭しと浮びける」沖には數多の水雷艇日夜警戒懈らず、嚴重にこそ守りたれ、頃は如月八日とよ 中干 日ははや西へ遠方の支那大陸に沈み果て、地 暮色蒼然と迫りけり」狹霧深くとぢこめて、海の面凄き時こそあれ旗艦水雷に令すらく、吟替 今敵艦を破らずは、何時また機のあらざらん、此一擧は我軍の大勢定まる秋なりと、死力を盡し諸共に、いざ行け我は一同の成功祈とありければ、地上 勇敢決死の水雷艇いかで此際躊らはん、敵艦いかに强

くともやはか擊て沈めづば 大干 生きて再び歸るまじ、安心あれと計りにて、黒白も分ぬ 崩レ 闇の夜を浪を蹴だてゝ堂々と、旅順口へと進み入る、虎穴に入らずんば虎兒を獲ず、敵の艦より擊出す、砲煙彈雨の其中を近く攻め寄せ擊出す水雷管の爆發に、逆卷く浪の物凄く、百雷ひとしく落るに似て、暫し叫は歇ざりしが、亂れたつたる敵艦は此勢に怖ぢ恐れ港内深く遁げて入る、我艇隊はこれを見て躁さず猶もすゝみ入り、再び放つ水雷に、大干 さしも慢りに慢りた

る雲突計りの軍艦も、物の美事に打なされ、見る〳〵中に三隻は渦まく波に沈みけり、 地上 我艦これを望見て水雷艇をひき纒め 中切 勝鯨波あげて引揚げける、 地 吁成功偉烈後の代に光り輝やく日の本の 切 武威の程こそ芽出たけれ

噫兩中尉

地 雲か霞か將た花か、空は曠たる瑠璃の色、下は野面に翠布き、禽も長閑に唄ふらく、 中干 春やゝ酣けし大正の、二年三月二十八日、

大干 彌生の空に羽を伸せる、 中切 軍事演習の行なはれ」 地下 數多の勇士それ〴〵に、得意の妙技現はして、 中干 入間の野邊の牙營より眞一文字に空界を翔りて着陸や青山の、 地 原頭蝟集る數萬の人々口〳〵に喝采と計り褒め讃へ、喜こび迎へし航空の大丈夫多き其の中に

大干 一層めだつ二勇士は、砲兵中尉の官職を帶ぶるは、木村鈴四郎、 中干 歩兵科より特選したる今一人、 大干 姓は徳田に名は金一」

地變 階に技倆は長けぬれど、 切 年未だ若き白面の、 中切 前途多囑の

將校なり、地 今や任務は半ば了へ、卒ざや牙營に歸らんと、中千 再び乘るは武烈理雄の、單葉飛行機操縱し、地 轉把巧みに動がせば、發動力の音凄じく、虚空遙かに舞ひ騰り、崩 後れ先だつ行く雲と、天のみ原に競ひつゝ、入間の空に翔けゆける、中千 雄姿堂々勇ましく、大千 魁なせる武烈理雄の、中千 跡に續くは德川式の一二三、其數併せて四飛行機、雁行なして驀進ら、地變 霞を破り雲を衝き」入間の里を瞰下して、早や程もなく所澤、牙營に殘る將校等、望樓高

くうち登り、大千 板橋田無二街道あなたの空を展望し、この勇ましき空界の若殿原の着陸を、今や遲しと松井村、時しも正午の頃かとよ、陸を放るゝ三百の米突保ち武烈理雄は、中切 兩翼張れる大鵬の風を切りつゝ翺翔するが如くなり。』折しもあれや 大千 風伯の、何を怒るか渦まける、一陣颯と颱の、中千 勇士の功績猜めるか』大千 アナ無慘、地變 武式の飛行機したゝかに、左翼を搏て逆まに、吟替 筋斗うたせば爭でかに、防がん術のあらずして、中千 あなやと見る間に

武烈理雄は、地いと恐ろしき音響を、中干 此世の名殘と眞逆に、急
傳直下の其狀は、何に比喩へん物もなく』吟 哀れ果敢なき現世の、
生者必滅の理は眞のあたり、地變 さしも雄姿を空に誇りたる、大鵬
の如き武烈理雄は、見る影もなく、微塵となりて紛齏し、木村中尉
は固く握りし轉把の、中干 其手は死すとも放さずに、德田中尉は拳
をば確かと握り、中干 頭腦は碎け肉破れ、英魂遠く幽冥の、虛空遙
かに飛び去りて、屍は茶毘の烟と消ゆるとも、地上 我航空界に犧牲

の多大の貢献さゝげつる、大干 其快擧は末世まで語り傳へて盡きざ
らむ、切 語り傳へて盡きざらむ。

國の御柱

港川流れの水のいと清き、名も橘の香は八千代はおろか萬代の 切
末の末まで馨るらむ」大干 赤阪山の秋の暮、その赤心の紅は紅葉の
色に輝きて、三度び寄せ來る人波を、太刀風つよく打拂ひ、地變 か
なたの空に雲晴れて、月住吉や天王寺、鐘の響はそれとなく、中切

諸行無常と告げ渡る、川は寄手の三途川、おのれと溺れ沈みゆく、
×××××××××

千早の城に魁けて、中千 かつ色見せて山櫻、嵐や花の敵なるらむ、

ふたりのしれもの詠みたるは、吟 我が身の上としらま弓、ひかれて
葉の人型に、地 誑らかされて二つなき、命を落す輩こそ、哀れと云

ふもおろかなれ、大千 金剛山の巍峨として、雲の上まで聳えしは動
かぬ君がこゝろにて、寄手を押へその罪を、糺の前へ押出し、地 出
雲路かけて火を放つ、切替り 僧都を語らひ泣しめて、あらぬ屍を尋ね

させ、中千 四條磧による波の、より〳〵人を欺くも、地變 心は潔き
櫻井の驛に於て、切り いとほしき蕾の花にわかれしも、皆これ大君
のためぞかし、地 筑紫の山の杜鵑、友呼びあつめ九重の雲井の空を
こゝろざし飛ばんとするを射とめんと、大千 弓に矢番ひ見渡せば、

地變 須磨の上野と鹿松の、岡にどよめき叫びあふ、聲は猿猴か小男
鹿か、遁さじものと、遠近に、群がり集ふ獸等を穗串にあらぬ鎗先
に、指て行衛をつく〴〵と、思ひ廻せば此後は、山杜鵑山を出で誰

はゞからず啼渡たる、世とやならむと末かけて、悟るたけ雄は今爰に、大干死して七たび生れ來て、鳥や獸を狩つくし、大御心をやすめんと、家門集へて港川、哀れ果敢なきうたかたの、水の泡とぞ消えにける

豹死留レ皮豈偶然　港川遺蹟水連レ天
人生有レ限名無レ盡　楠子誠忠萬古傳

中干　嗚呼これ橘の花の香り、世々につきせぬしるしにて、地亡後の跡までも諸人の、切袖にかゝりは殘りけり」、後の世までも諸人の

切袖にかゝりは殘りけり

殿中双傷

地塵もゆるがぬ靜かなる、御宇泰平の東山、人皇百十二代に在します、中干叡聖允武の皇を、上に戴く抑營は、大樹の枝葉いと茂り國を三つ葉の花葵、照日の惠み色深き、七重八重咲き九重の京の都をいでましの、地中雲井に侍べる貴人は、大干帝の叡慮齎らせて、

花の東へ御下向と治定ありける其日より、時の大樹に在します、五
代の將軍綱吉公　地上　夥多の諸侯ある中に、勅使歡待饗應の、重き
臺命を下せしは、淺野と伊達の二侯にて、變凡てを指揮し敎ゆるは
古典禮範精通の首席高家の一人にて、中干　婪貪卑吝の聞えある、吉
良上野介義英なり、　地　伊達は苞苴に上野と結べど内匠長矩は、清廉
潔白贈賄の正なき徑を辿らねば、上野私かに怡ばず、權威を笠に何
や彼と中干強面なせるそれのみか、中切　忍び難なき凌辱は、武門

の慣ひと是非もなく〳〵抜さ放つ　地下　淺野内匠の胸の裡、家をも身
をも顧みず、たゞ一討と上野を、大干　松の廊下に襲へども、拙なき
武運か逸したり、　吟替　噫、いかにとやせん、春の日の申刻下りの夕
まぐれ、本意を遂げず空しくも、田村屋敷に、ちら〳〵と、音なく
ふるや花咲雪、　地下　恨を呑んで長矩が、遺すかたみの筆の跡惜む名
殘は春ならで、惜む名殘は春ならで』

橘大隊長

故 吉水經和大人作

地中 奥大將の許にあり 地中 大島縱隊の關谷聯隊は、首山堡の激戰に橘大隊長を失ひて、その大畧をかなでんに、切 聽者誰か泣かざらむ 大干 明治三十餘り七歳の 中干 八月晦日いと堅き石原聯隊を先として、遼陽一の堅壘を嚴しく襲ひはじめたれど、損害のみ多くして、ひねもす苦戰を爲しければ、地上 大島將軍の豫備隊の、關谷聯隊を殊更に、中干 先登部隊と定めける、地上 橘大隊長先陣に立てすゝ

めば途次、風蕭々として腥く、地下 月朦朧として火眠る 地上 夜は丑寅となりし頃、崩レ 大隊長は號令を下すや、兵士みな勇みたち、獅子奮進の鯨波の聲、天地も裂ん計りなり、斷崖絕壁を攀ぢ登り、攻入るまでの間には、九十九折なる二條の、壕を楯とし敵兵は銃丸はげしく打出す、鬼神を挫ぐ我兵は苦戰に苦戰を重ねては、功少なくして害多く、橘大隊長は牙を嚙み、阿修羅王の荒るが如く、大和劔を振翳し、壕の内に跳りこみ、大喝一聲叱咤して、群がる敵を右

左、蜘手おく繩十文字八ツ花形をいふまゝに、露は苅菰を斬て棄つ
慿る勇猛の振舞に、部下の將卒感激し大隊長を討すなと、異口同音
に呼はりて、壕ともいはず斬入れば、さしもに堅固の敵壘も、忽ち
落て日の御旗」中干 壘上高く飜り 地上 萬歳の聲止まざりき、敵は無
念に堪難て再び爰に押かへし鯨波をつくつて三方より、中干 いとゞ
劇しく砲火を濺ぎかくれば、芳はしき花橘の大隊長、左手肩先嫌
ひなく、深手輕傷を負たれど、從容自若神の如く、地上 自ら疵に繃

帶し四方を瞰下す絕頂に、中干 動きもせずに直立し、地上 敵情具さ
に見てあるを、内田軍曹呼かけて 大干 大隊長殿危險なり』中干 遺憾
ながらも此場合一時退却なさらねば大隊總て全滅せむ、地上 大隊長
は此時に初めて身をば動かして、淚を押へ劍を撫で 中干中 部下のか
くまで倒るゝを見ては己は耐へられず 吟替 併し軍曹考へよ、今日は
八月三十一日にて、恐れ多くも畏くも、東宮殿下御誕生日ぞ、斯なん
貴き日に當り部下の三分の一を死なしめて、漸く取りし敵壘を見棄

●て彼に與へんは、かへすがへすも無念なり許せ軍曹辛くとも今上陛下
●の御爲めと、帝國陸軍の其爲めに、我と枕を並べつゝ共に戰死をし
●て呉れと、言を聞居し軍曹はたゞ感涙にむせぶのみ」 地上 此時敵彈
●飛び來り、大隊長は深疵を再び負へば鬼神を欺く士も、仰のけに
中干 撞と音して倒れける撞と音して倒れける（下略）

河内の宿

地 散るを習ひの櫻井の、敎の露に袖ぬれて、還らぬ父の歸をば 切 待
つや河内の宿の戸を、大干 叩く水鷄の音にさへ、いでゝ幾度び眺め
けん、降りそふ雨の夜を更けて、なに松風のさわぐらむ、地 心の波
をしづめつゝ、敵が情けの贈り物、吟替 開けば哀れ思ひきや、父が
●血汐の首級とは、色は青ざめ眼は閉ぢて、齒をくひしばる御姿に、
●母は涙の玉あられ無念は同じ正行は、父が形見の刀もて、既に自害
●と見えにける、地 母は小腕にとりつきて、聞かずや汝梅檀は、二葉
●ながらに芳ばしゝ、汝幼き身なれども、父が子なるぞ母が子ぞ、中干

などや斯ばかり血迷ひし、　地變　父が汝を止めしは跡をとはんが爲ならず、腹を切らんが故ならず、君何處にも御座あらば、我旗風に世を靡け　中吟　君が御代にもせよとなり、　地　自ら母に聞かせしを、早くも汝は忘れけん、斯くては家の名を穢し、君が御用にたゝん事、思ひやるだに渚なる、　中干　この捨小舟いかにせん、正行今は禮盤の上よりよゝと泣き下りて　中切　身ぞ浮草の涙川、　地變　懷けは深きたちぬの敎の露に生ひたちし　切　楠の若木ぞ芳ばしき、若木ぞ芳ばしき

風雅の大高

地ノ中　何のその岩をも貫す梓弓、文讀むみちも暗からぬ、　中干　名に大高の源吾とて、其眞心や赤穗武士、　地上　亡君の無念を晴らさんと空かき曇る大江戸のつゞく三日の大雪に、大路小路の差別なく、皆な一樣の銀世界、　中干　風雅に流み文弱の詩歌管絃に耽溺の、大干世は泰平の元祿も、はや押詰る十五年月は師走の中四日、　地　月こそ違へ日は同じ、　吟　去歳の彌生に亡せ給ふ君の御無念受つぎて、君に殉

●がふ今霄こそ、地上怨敵吉良の御首を打つて鬱憤はらさんと大干勇○
●●●●●●
みて心播磨武士、其數併せて四十七、地其一人の丈夫にて、死出の
○○○○○○○○○○○○
山路は諸共に中干皆な一齊に打扮ちて、雪の夜路の音もなく、天地
×××××××××××××××××××××
寂漠江東の、流れに架せし二州橋、渡れば速しや歳月日經つは一年
×××××××××××××△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△
九の月、時運到來松坂町、讐家の門に殺倒す」地上斯時、盟主内藏
△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△
助、手配萬端違算なく、無辜の隣人害めじと、傍杖防ぐ中干註進の
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
役に撰むは源吾なり、地中源吾命を嘲みて驀然、隣舘本多の門外に
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

夜襲の趣旨を大音に呼はる聲は勇まれて、大干雄叫び猛く吉良の門
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
物の美事に打ち破り、地上數多の味方と諸共にこみ入り〳〵討入し
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
ば大干驚破やと計り、吉良の衛士爰を先途と獅子奮盡の勢ひに防ぎ
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
戰ひ、此處や彼處に火花散り、奮闘果てしあらざりき、地下此時大
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
高は、三四の敵を斬り伏せてかへり血浴ひて朱に染まり、名もなき
端武者眼にかけず、目的すは怨敵上野と猶も奥にと進みゆく、中干
折から背後に聲ありて、我俳名を呼ぶ人あり、地下何者やらんと打
×××××××××××××××××××××××××××××××××××

見れば、隣れる庭の松ケ枝に攀ぢて瞰下す其人は、禿衣圓顱の姿にて、中干 見紛ふかたなき俳友の、寶井其角昨日の、 地 二州橋上出會の無禮を詫びて恐縮す、 中干 源吾見聞て打笑ひ、心にかけしさまもなく

×××××××××× ×××××××

我が雪と思へば輕し笠の上
月雪の中や命の棄てどころ

地 互ひに交す風流の名句を吐きて芳はしく、 切 後の世までも語りぐさ

—後の世までも語りぐさ

富士裾野

『曾我の討入』

地ノ上 雲井に聳ゆる富士の嶺の、深雪は解けても解けやらで、十有八年積りにし切恨みを晴らせし物語』 大干 抑も曾我の兄弟が、 中干 幼き時の名を問へば、兄をば一幡、弟をば箱玉とこそ呼びにけれ、 大干 二人が年を併せても、地上 十年に足らぬ幼な貌、 地下 母はつく〴〵打凝視、いとゞ歎きに沈みけれ、 中干 幼な小供の心にも 地上 恨

は五體に泌みわたり　地上　成長したらん其時は、讐をぞ討たんとまつ月日、　地下　春夏秋冬一日に、　地上　來らんものかと語り合ふ、二人が言の葉聞く母は、　中干　末頼母しくぞ思ひける　大干　時しも九月十三日月影隈なき庭の面、眺むる折柄御空ゆく雁をば二人は數へつゝ兄上五つの雁の内二つはかれが父母か、禽だに父母あるものと嘆げくも實にこそ道理なり』　地上　洵や光陰矢の如く一幡今年髪を上げ、　地下　曾我の十郎祐成と、　地上　名を改めてぞ呼びにける、箱根にあり

し箱王も、曾我の五郎となのりつゝ、　地下　母の心に背きしも此世に在せぬ父が爲め、　大干　建久四年の夏五月　中干　頼朝富士の裾野にて御狩をなすよと、傳へ聞く二人が心やいかならん、　地上　定めて讐敵の祐經も供にてあらんと勇みたち、　地下　人目を忍びて兄弟が、　中干　刀の目釘を濕しける、　吟唱　御狩の供にこと寄せて、それと言はねど死出の旅、覺悟を極めて兄弟が別れを告ぐるは母の許、母はそれぞと汲み知りて、今さら別れの惜まれて、身を大切にと一言の、いかな

る情や籠りけん、地上 さらでも暗き五月雨の雲吹き亂す山颪、地下 篝の火影搔き消えて、地上 黒白もわかぬ雨の夜半 大干 篠つく大雨を冐しつゝ 中干 木戸〳〵打越へ忍び入り、奥なる襖あけ見れば、地 祐經こゝにぞ寢たりける、中干 十郎枕を蹴散して、祐經よく聞け、よく聞けよ、十有八年我々は、忘るゝ隙なき親の仇、かへさんものと斬り懸る、地上 切尖鋭き兄弟がその太刀風こそ年ごろの、地上 恨み――の霧を晴しけれ――』

櫻井の訣別 「小楠公」

地ノ中 世は浮雲のゆきかひて、地上 またもや曇る皐月闇、地下 山時鳥血に啼て、地上 たてし策さへ容れられず、武運につきし身はとまれ、切 吁我君をいかにせん』大干 吾れもし死すと聞まさば、中干 黒木の御所の板庇、北山風の射る矢をば防ぎかねつゝ世をわびて 地上 御衣の袖も五月雨の 地下 哀れいかにや歎かれん、地上 聞よ正行さすがにも、獅子は我子を産みて後、中干 やがて高嶺の巖より、雲千仭

の溪底に、突き落してぞ氣を試す、地上　情のなきが情けぞや、地下
況や汝今すでに、中干　年は十歳に餘りあり、地上　父が今はの一言の
地下　耳にとまらば若竹や、地上　まだわかき身ながらも、中干　教へのふしに違ふなよ、大干　偖てこのたびの一戰に中干　天下の安危さだまれり、汝が顏を見んことも、これを限りと思ふなり、地上　正成死せは忽ちは、地下　代は尊氏に歸すならん、中干　露の命のいと惜しみ、
地上　ために多年の忠も義も打忘れつゝ逆賊の軍下に降ることあらば

地下　我れ父ならず汝らは中干　我子にあらず、臣ならず、地上　倘し一旅の一人だに、生き殘りてぞあらんには、金剛山の城枕、中干　引こもりつゝ戰へよ、地上　これ第一の忠なるぞ、これ第一の孝なるぞ、香は千秋の末かけて、匂ふためしと地下　菊水の、筐の刀西東、跡見かへりて別れゆく、その中空のさみだれに、切　啼く聲たかし郭公

山科の訣別

地　俱不戴天の君の仇、敵に油斷のあらざれば、切　暫し鋭氣を山科

—の月に憧れ—れ夜を徹—し—、地上 花に戯れ、香に迷ひ、春の胡蝶のひら〳〵と、浮かるゝさまは他愛なく、京の島原かたばめや、大千 狹斜の巷に出づ入りつ、浮大盡の名も高く 中千 癡果の如き其人は、鬼神も哭す盡忠の、智畧勝れて畜積し、抽してもつさぬ内藏助、萬嶽膝下に崩るゝも、泰然動がぬ大石の、地上 心の中を探らんと、智惠もさかしき猿橋や其他まつはる敵よりの、間者欺く苦肉の策、吟替 左右に美人膝の前、ならべ列ねし肉林や、酒の泉に飲食は、無間地獄

の苛責よりいと猶辛き思ひをば、誰に語らん語るべさ、たゞ浮々とうき草の葉末に宿る露の玉、やがて消えゆく身なれども、地上 田畠を拓き苗を植へ、東へ下る狀もなく、詐り裝へど未だ足らず、地下いとしの妻の緣切り、心を鬼に恩愛の絆にからむ態もなく、我子を添へて母までを家を遂ひたる沒義道は、地上 流石の敵も油斷せり、中千 吁忠孝の兩途を踏むには難き内藏助、地上 さしもに固き臟腸も寸斷さるゝ苦痛なり、切—寸—斷—され—し—思—ひなり

吉野落

地 美吉野の花も齡田のもみぢ葉も、夜半の嵐に誘はれて、あだに散りゆく時は又まして、切哀れに思ふなり』 大干 茲に二階堂出羽の入道道饅は、地上 元弘三年正月に六萬餘騎を從へて 地變 大塔の宮の日頃より籠らせ給ふ大和なる吉野の城へぞ攻め寄する、地上 栞摘川の傍より、吉野の方を見あぐれば 由干 白旗赤旗錦の旗、み山嵐に打なびき、雲か花かとあやしまれ、地 麓には敵の大軍隙間なく、兜のほしを輝し、鎧の袖をつらねしは錦を敷くに異らず、峰高して道細く山險しく〳〵て苔滑らかなり、地上 幾千百の精兵が妾死となつて、攻むるとも容易く落べしとも思はへず、地中 恁る處に、崩れ 同く十八日卯の刻より兩陣鯨波をどつと揚げ、敵攻め上れば攻下り、互ひに勇氣を振ひつゝ、此處の谷彼處の峰に馳せ上り、攻め合開き合ひ、射手を揃へて散々に射たてれど、寄手の勢は皆な命を知らぬ坂東武士、親打たれても顧みず、主倒れても取り合はず、骸を乘越へ〳〵

△七日が間息をも續かず攻め戰ふ、血は草芥を染め屍は路頭に横たは
△る、恁る處に敵の案内者岩菊丸は足輕共に下知をなし、金峰山の險
△を越へ木の根岩角攀ぢ登り、在所在所に火を掛けて鯨波をつくつて
△攻めければ、城兵も今は前後の敵を防ぎかね、自害する者あれば、
△猛火の中へ馳せ入て死するもあり、向ふ敵と引つ組で討死する者も
△あれば、宮に註進する者もあり、大手の堀は乍ちに、死骸を以て埋
△めたり、地中宮は此由聞こし召し、緋おどしの御鎧に龍頭の兜を召
△させられ、三尺五寸の小薙刀を脇にはさみ、屈竟の兵共、崩れ廿
△餘人前後左右に引き玉ひ、面も振らず切つて入り、砂子を飛し煙を
△たて、東西を打拂ひ南北を追廻し爰を詮度と戰ひ玉へば、寄手の勢
△も此二十餘人に切りたてられ、風に木の葉の散る如く、四方へ颯と
△敢りにけり、地上宮はこれより藏王堂の大廣間に悠々と引き上げ玉
ひて、地下軍兵と最後の御酒宴をぞ召されける、此戰に宮の召し
たる御鎧は、地下七筋の矢に貫ぬかれ、頰さきと二の腕に二ケ所の

突傷を負はせ給へど、立たる其矢をも抜かせ給はず、地中 流るゝ血潮も拭はせ玉はず、敷皮の上に立ながら、地上 大盃を三度まで傾け給へば、木寺の相模四尺三寸の太刀先に敵の首を刺し貫し、大干 聲高らかに謠ふ様、地中 戈戰劒戰を降す事電先の如く、地下 盤若山岸を飛すこと急雨の如しと雖、地下 天帝の身には近よらず、却つて修羅彼が爲めに破らるゝと、地中 太刀振り翳し舞ひたるは、彼の漢楚の鴻門に楚の項伯と頂裝と劒を拔て舞ひし時、樊會庭に立ながら、地中 幕をかゝげて地上 項王を睨みし勢ひも切 ―かくやと思ひ知られた―

―り―

此一戰

地中 明治三十あまり八歳の、地上 頃しも皐月の末つかた朦氣も深き曉に、切 ―濟州島の沖遙か、大干 敵艦今やよせ來ぬと、中干 物見の艦の信號に、脾肉の歎を漏しつゝ 中干上 待に待たる我軍は、天の與へと雀躍し 中干切 舳艫啣んで錨拔く、』地上 皇國の安危此一戰、かゝり

て我等大丈夫の、中千肩にあるぞと奮ひ起つ、中千上戰士三萬意氣高し、、、、、、、、、、、、、、荒ぶ風浪何のその、醜虜鑿滅するまでは、再び生きてかへらじと、、、、、、、、、、、、、、地上 勇氣凛々進む間に、正午も過ぎてはや半時、地下 霞める沖の島の邊に、地上 煤烟一とつまた二つ、次第に見ゆる數十條、大千旗艦ス○○○○○○○○○ワロフ始めとし 中千 續く敵艦約四十、二列縱陣嚴かに、浪を蹴立て、、、、、、、、、、、、、、すゝみ來つ、地上 軈て射出す砲聲は、崩段々轟々凄まじく砲烟天に、、、、、、、、、、、、、、漲ぎりて、白日爲めに光なし、奮戰茲に數時間、我勇猛の砲擊に今△△△

極東はるかすゝみ來し、彼の剛勇の波羅的も 中干 大和武夫に敵し得で目指す港を前に見て、沈みつ燒けつ奪はれつ、消えて哀れや水の泡、地下 山は青々水淸き、秋津洲根に寇をなも、醜虜はいかに猛くとも、切 何どか敵せん大和魂、地上 やがて東海浪すさぶ、切 底の藻屑と消え果てん、底の藻屑と消え果てん」

譽の德利

地中 錦に勝さる赤合羽、包む心の赤誠は、地上 誰かは知らむ白雪の

玉も埋まる銀世界、地中 溶けての後ぞ知らるなれ、大干 茲に播州赤穗の浪士にて、赤垣源藏重賢は、地變 恨に沈む亡君の魂なぐさめむと怨敵の、吉良上野の白髮首、狙ふ剛力落し佩、吟 覺めしこゝろも醉へる身の、蹣跚跟々千鳥足、覺束なげの步み振り、地上 來懸る處新錢座、今宵にせまる會稽の君辱すゝぐ六の花、地下 散らば再びかへらざる、此世のいとま乞はいやと、中干 身に赤合羽饅頭笠、地干 右手に提げたる酒德利、醜き姿も厭はずに、脇坂淡州の家臣にて、

其兄鹽山瀬左衛門、賜はるお小舍訪へば、切折しも惡し骨肉の兄瀬
―左衛門、殿中出仕の不在なれば、地中せめては生さぬ姉になと、面
―――――――――――――――――――――――――――――――――
謁望めどこれも亦た、地下持病の癪に事よせて、謁し呉れぬぞ是非
もなく、訣別をつぐる術もなし、中干吁、死する臨終の別れさへ、
心に任せる口惜さと、無念の涙も、地上酒に紛らす空笑ひ、衣桁に
かゝる兄人の、小袖に對ひうや〳〵と、携へ來る德利より、中干汲
みてさゝぐる諸白の、香りは高く芳はしき、後の世までも、殘る美

談となるぞとは、地下誰しらま弓、ひけば再びかへらざる、兄の家
をば源藏は、地上いでや去なんと立つ脚も、四途路亂れる心根も、
酒にまぎらす斷腸の、非哀に胸も張り裂けて、萬斛の涙を抑へ立出
づる、地中折柄颯と吹き荒む、雪は卍巴とふりかすみ、吟行人絶へ
し雪の路、誰に恨を夕告の鐘に心もひきたちて地上見かへりもせで
鹽山の、門をいづればいつしかに、切吹雪の中に、消えにけり』
―――――――――――――――――――――――――――――――――

母の誡

地中 木の葉みな 地下 身にしむ風に誘はれて、 地下 散りてゆくての山は痩せ、 地上 軒端あらはに見え渡る、草の庵に夜は更けて 切 絲繰る
―音のかすかなり―』 大千 山の端高く月冴えて、 中千 木戸の板橋霜白し
傾く窓の燈火は、夜な〳〵細く輝きて、紡ぐ車を照すなり、 地上 頭に戴く白雪は、痩せたる顔に降りかゝり、地下老たる身にはさゝがにの、糸をる業の苦みも出て戰ふ己が子の、 中千 苦勞を思へばいと輕し

網引する舟の夜寒を身に泌みて
寢られぬ妻やころも打らん

地下 と漁人を思ひやり、ねられぬ妻が寒き夜を、衣を打つて夜をあかす、 中千 これと變れど愛情の、心は同じ母親は、 地上 我子の困苦を忍びかね 中千 指先凍る冬の夜も、厭はで紡ぐ健氣さはこれも同じく國の爲め又大君のためならむ、』 吟替

●立つ霜柱踏分けて、
●朝な夙

●なに母親は、鎮守の神に武運をば、我身にかへて祈りけり』眞心籠
●ての祀願には神も哀れと思召しいさほを立させ給はんは鏡にかけて
●見る如し』地上 紡ぎし糸を布となし、送りし先は大丈夫が、深手淺
●手の差別なく中干 包むたつきとなりもせん』地上 恐れは多きことな
れど、皇后陛下の御心に、露ほど叶ふものならば、切 老の身にとり此
上もなし』地上 足曳の山の奥なる草の屋に、地下 老ひ朽ち果し女さ
へ、地上 出來得る限の業をもと、國につくさん赤心を地下 思へば猛

き御軍の、地上 前にたつべき敵なきは今さら言ふもおろかなり、切
今更ら言ふも疎かなり』

小松操

地中 忠孝文武兼備へ、其身亂世に生れ來て、幾十の艱苦に堪へ 切り
遂に操をかへざりし、大干 小松の内府重盛が、中干 世に盡したる心
こそ、思へばそゞろに哀れなり、地上 照野詣での歸り途、都の變を
聞し時、たゆたう父を勵まして、馳せかへりたる重盛が、待贅門の

戰に、強敵義平を事ともせず、進み討たる其勇は、平將軍の再來と、中千人の云へるも道理なり、大干時は平治地は平安、我は平氏ぞ此三つの、兆あるこたびの戰は、必勝無論と軍卒の、地上士氣勵まし進みしは時にとりての才智とこそは云ふべけれ、地下子息資盛未だ若くして、時の攝政基房に遇ひし時、下乘せざるを咎めつる前驅の者の暴行を、地上淨海怒りて基房に、再び恥を與へしに、地下重盛いたくこれを恥ぢ、遂に我子を誡めて、中切伊勢に遠ざけ追け××××××

るは、地上尙朝庭を尊敬し、禮を守れるのみならず、父淨海が誤りを、切補ひ得たりと稱すべし、補ひ得たりと稱すべし

四條畷

時しも、御代は正平の、三年の春の初めにて、吉野の山は白妙の、切り雪に梢を埋められ、大干萠え出づる木々の下草は、中干皆足利の足下に、踏まれ敷れて哀れにも、延る力もなよ竹や、折れてもみさを變へまじと、誓ひし君は去年の冬、吉野に詣で大君の、地變化上

●龍顔拜し奉り、亡父正成の先帝に、仕へて忠を盡したる、その赤心
●を受繼いで、中干變化中我とも心筑紫潟、浪と寄せ來る賊軍を、拒ぎ
●戰ひ退けて、君の叡慮を休めんと、吟替り思へど我は不幸にも、病
●の多き身なる故、空しく時日を過す、うち若しや病に冒されて、溽
●の上に玉の緒の絶ゆる事のあるならば、君の爲には忠ならず、又な
●き父には孝ならず、病の爲に果敢なくも、黄泉の鬼とならんより、
中干 此所に寄せ來る賊兵と、大干 刃を交へ潔く、中干 生命を捨て、
△△△

朝臣は、漸々立上り、あつき涙の降りかゝる、鎧の袖を拂ひつゝ、

切り　徐に行在を罷り出で、大干　一族郎等隨へて、中干　先の帝の御陵に、參詣でゝ前に跪き、戰ひ若しも利あらずは、地變化上生きて歸らぬ覺悟故、此世の別れ告げん爲、遙々こゝに參りしと、中干變化中云ふも濁れる涙聲、濡れてぞ重き袂をば、絞りもあへず立上り、中干如意輪堂に赴きて、大干　御佛拜み奉り、中干　それより堂の壁の面に、死を誓ひたる義士の名を、記しゝ數は百餘人、朝臣は鏃取出し、落つる涙を拂ひつゝ、氣を張りつめて梓弓、引返さじと思ふより、なき數に入る忠臣の、名をぞとゞむる名歌をば、彫り付け給ひさらばとて、吉野を發し河内なる、中切　四條畷に打向ふ、時は、師走の廿日すぎ、切り　七日の日にぞありにける

彰義隊

地中　住みにし馴れし大江戸の、都の空は曇りがち、降りみ降らずみ

地下　五月雨の軒端の雫、音絶へぬ、大干　慶應戊辰初夏の頃三百餘年

握りける覇業全く滅びたる、前の將軍慶喜は、地下　暫し屏居の東叡山寛永寺中に蟄伏し、中千　忝、順待罪の實を擧げ、軈て其罪減ぜしか、地上　幽居を水戸に移されて、筑波颪の肌寒き昨日に變る謫居の身、中切　斯くと傳へて聞知りて、つどひ集まる旗下の德川武士は數千騎、地上　そゝろ昔を忍ぶが岡、上野の御山に閉ぢ籠り、地中　王師に敵對ふ順逆の是非曲直は知るものゝ、中千　三百餘年榮えたる葵の花の露に生き、譽を人に三河武士、地上　其末に生れ來て、一矢もむくひず阿容〳〵と、千代田の城は渡すまじ、切　刀の柄に手もかけず、やはか江戸をば去るべき』地中　同氣求る焦り雄の天野八郎始めとし、盟ひをたてし丈夫は、彰義隊とは名づけつゝ、東照宮祠を中心に、崩レ要所〳〵△要所に備を立て、雄々しくこそは見えにける、されど△味方は烏合の勢、殊に△輪王寺の宮こそ在せ、錦旗に弓ひく朝敵のいかでか勝を得らるべき、まづ戰鬪は東雲の、まだ明けやらぬ山下に、犇と攻め來る諸藩の兵、細雨砲烟朦々と、打合ふ劍に火花散り

△互ひにあぐる鯨波の聲、地上 方里に足らぬ丘陵に、籠る孤軍の哀し
△△△

送別

作者不詳

地　茜さす我が日の本に人といふ、人の中より撰まれて、海原遠く浦々の、浪の花咲く異國に、渡り行くなる君が名と、中干切り譽は世々に殘るらむ、大干茲に船出を祝はんと、心をこめて足引の、山にて狩り得海に釣り、川に漁り野に求め、猶あきたらで鳳を裂き、麟を屠りて盃を、勸むる中にかたへより、吟ずる聲の高らかに、

渭城長雨濕二輕塵一
客舍青年柳色新
勸レ君更盡一杯酒
西出二陽關一無二故人一

古き調の唐詩に、思をよせて別れをば、惜しむ心もなつかしく、皆とり〳〵に又酒を、中干切り勸めて興をぞ添へにける、地暫くありて一同に、盃さゝげ起立して、君萬歲を唱へけり、切り君萬歲を唱へけり。

和

作者不詳

地　和光同塵の神の道、あまねく闇を照せども、弱肉强食の世の中は、

中干切り　大干

猶爭ひの絶間なし、こゝに國を立つるもの、軍備怠ることなかれ、

中干

敷島の、大和の國は昔より、人強うして義に堅し、昇る朝日は高千穂の、峰よりつゞく大和路や、其東征の旗風の、新羅に渡る御稜威

地

靡き從ふ高麗百濟、三韓長く藩屏の、御代を傳へて二千年、刀夷の賊の騷ぎにも、蒙古の寇の荒びにも、動かぬ國の礎は、寄せて碎くる白浪の、我より起る胡蝶陣、高麗大明を動して、其國震ひ怖れけり、絶海船を連ねては、豊太閤の大雄圖、彼の社稷も是よりぞ、傾

く運の末終に、果敢なく消ゆる春の夢、秋の風にも合はずして、

中干

我は榮ゆる大日本、

地

時に浦賀の海騷ぎ、馬關鹿兒島時の間に、砲火の巷となりしかど、暫時が程に風なぎて、毒藥變じて良藥と、なりては敵と手を握り、攘夷の國是闔國と、なりぬる運の月と日を、かけ

中干

替へられし王政は、こゝに維新と鳴る神の、天じもの、

地

清國命に違ふ時、撃てば碎くる威海衞、露國我に仇する日、攻むれば落つる旅順口、陸の勝利は奉天府、海の勝利は日本海、

中干

振古未曾の大捷は、

人の力か神業か、（地）和國強大の四文字は、（中干切り）夫の暗示と知られけり、（地）和
強の二字は幾千の、（切り）神の心やくもるらん。

小敦盛一段

平家物語校訂

（地）祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必
滅の理をあらはす、驕れる者は久しからず、貴き人も終りには、（切り）遂
に亡ぶる習ひあり、大干扨も此度源氏平家の戰に、（中干）平家方一族母衣大將
の其中に、もゝの哀れを止めしは、無官の太夫敦盛にて、諸事の哀

れを止めたり、（地）敦盛其の日の出で立ちは、何時に勝れて花やかに、
まづ肌よりは梅の匂ひの肌寄せに、唐紅を召されたり、練絹に色々
の絲を以て、秋の野の草盡しを縫ひたる直垂に、弓手の手づがひ雨
面の、脛當に萠黃縅しの鎧着て、鍬形打ちたる五枚兜の緒をしめ、
鎌倉作りの御太刀を佩かせ、二十四さしたる染羽の征矢を負ひ、塗
籠藤の弓を持ち、蓮錢葦毛なる駒に、梨地の蒔繪したる、白覆輪の
鞍を置き、御身輕げに召されしは、（中干切り）さも勇々しくぞ見えにける、（地）御

一門を始め、主上の御供召され、濱に下らせ給ひしが、吟替●●●

◎◎◎

邊へ寄せよと御諚なり、水主楫取畏まり、俄に櫓楫を立て直し、船を磯邊に寄せんとすれど、しかも此程より吹き續きたる、北風の烈しきに、地名殘の浪は今日も立つ、大干風は競ひて船は香車の如くなり、地白波世界をはぶき、眞砂も天に揚りければ、宛然雲の山の如くなり小船ならは自から、弓手妻手にも押し廻さるゝものなれど、殊に勝れし大船に、大勢は召されたり、次第々々に出づれども、逆捲波にせかれつゝ、磯邊に寄すべき樣はなし、敦盛今は駒を游がせ、崩れ船に

乘らんと思召し、駒の手綱を搔い繰りて、海中にさッと驅け入り、浮きつ沈みつ一段ばかりは進みしが、駒逸物とは申せども、逆捲く波にせかれつゝ、泳ぎかねてぞ見えにける、熊谷此の由を見るよりも、如何に平家の御大將、御座船遙に程を隔てたり、然も浪風烈しくして、よもや逃れたせ給ふまじ、引き返し勝負候へ、大干返し給はぬならば、某が中指を射てまゐらせんと、弓と矢とを打ちつがひ、徐に引いてかゝりける、地敦盛駒を引き留め、爰を逃れ落ちんとせしに

斯く運の極まる上は、若しも源氏の錆矢に射留められなば、平家末代の恥辱と思し召し、いざ爰にて勝負を致さんと、相圖をなして、駒の手綱を引き返し、海中より颯と驅け上り、染羽の鏑矢打ち違へ斯くこそ詠じたまひける、

梓弓矢をさしわけて引く時は
返す心を知るかそも君

と遊ばし給ひければ、熊谷も日頃心得ある弓取なれば、あつと心に應へ、左右の鎧を蹴張りして、頓て返歌に、

いたつきの早やはつれむと思ひしに
矢といふ聲に立ちぞといまる

と返歌をなして、心靜かに待ちにける。

小敦盛一段　同　上

地　去る程に、やがて敦盛打物の鞘はづし、熊谷に打つてかゝる、直實しつかと受け留め、受けつ流しつ爰を先途と火花を散らし、二騎並

びて面もふらず切り結ぶ、未だ勝負と見えざりしに、敦盛打ち物投げ捨て、いざ組まんと驅け寄るを、眞實も共に打ち物投げ捨て、快く驅け寄つて、馬上ながらに無手と組み、互に交はす聲の中、一度に鎧を踏み外し、兩馬が間に挫と落ち、上を下と返しける、痛はしや敦盛は、心は矢猛に勇めども、鬼をも挫ぐ熊谷の、物の數とも思はねば、心安く取つて押へ、首を掻かんとしけれども、餘り手弱く思ひさし、俯きて御相恰を見奉つるに、薄化粧鐵漿の有樣は、

殿上人の年の頃、十四五計りと打ち見へて、誠に容顏うるはしく、餘りに痛はしさに、少し引き寛げまゐらせ、扨は中々平家方にては如何なる御公達にて渡らせたまふかな、御名を名乘らせ給へとありければ、敦盛は熊谷に組み敷かれ、世にも苦しき息をつき、扨は中々武藏の國の熊谷は、文武二道と聞きつるに、中干何とて合戰に法なき事を宜ふやな、我は天下の朝臣として、月卿雲客の列につらなり、詩歌管絃の道には長せし身なれども、此の三年の間は、一門の運の

盡き、いとあこがれ亡びしより、武士の勇める法を粗々承はるに、
中干
夫れ武士の名を名乗るといふは、互に野陣に群りて、胡籙箙を腰に
つけ、打ち物拔き持ちて、我は何所の何某と、名乗りてこそ勝負は
致すなり、地只今敵に組み敷かれ、其儘名乗るといふは、今こそ初め
て承はる、直實の言葉に、仰せはさることながら、御苗字をあらは
し首を取り、直實が譽をあらはさん爲め、敦盛聞し召され、夫れは
隱れもあるまじ、只某が首を取り、御邊の主人義經に見せ給へ、若

しも義經見知らずば、蒲の冠者に見せ給へ、蒲の冠者が見知らずば
此度平家方より生け捕りの者も多かるべし、彼の者共に引き向けて
誰が首とも分からずば、其時こそは名もなき者の首と思ひ、只草叢
に捨てたまへ、のう熊谷とありければ、直實うけたまはり、中干扨は中
々武夫の勇める法を、大干悉しく知ろし召されしよな、地世に憂き者は我
等にて候へらども、君に隨身御身を助けんとすれば、親と合戰子と
中干
爭ひ、花の下なる半月の影、風の前なる一夜の燈、霽風朗月飛花落

葉と聞く時は、此の度の合戰に熊谷が、廻り合ふ事も前世の縁と思召し、地御苗字名乘らせ給へ、君の奉公其の忠に、浮世を吊らひ申すべしとありければ、敦盛名は何時までも名乘るまじと思へども、後世を吊らはん嬉しさに、中干我を誰とか思ふらん、我こそは、葛原親王の後胤、參議經盛が末子、無官は今の假名にて、太夫敦盛とは某なり、地今年歳は十六歳、軍は今日が始めなり、さのみに物を尋ねたまふな、早や首とれや熊谷とありければ、直實は涙を流し、扨は無官

の方にて渡らせ給ふやな、御年は十六歳、某が一子小次郎直家も、今年歳は十六歳、扨は御同年にてましますよな、御存じの通り直家も、此の度一の谷に先駈いたし、右手の腕に矢を射られ、某に打ち向ひ、中干此矢を抜きて給はれと申せしが、地如何に直家弓取が、敵と味方の其中で、餘り心弱しと思ひ、中干如何に直家、若しも其の手が深手なれば、駒より下りて自害せよ、薄手ならば敵と引ッ組んで討死いたせ、篠黨の名を汚すなと、じッと睨みてありければ、地其時某が方

を一と目見て、敵の陣所に駈け入るを、後姿を見しばかり、今二た目とは見えざりけり、此直實がつれなき生命ながらへて、武藏に歸り直家が、討死と聞かば誠に母は歎くべし、吟替まして經盛卿の御子息今日まで花やかに染めたる若君を、磯邊に一人御殘し、さぞや歎かせ給ふべし、哀れ貴きも賤しきも、子を思ふ道に迷ふとは、今身の上に知られたり、我が子小次郎に思ひ替へ、地助けまゐらせ候と、云ふより早く引き立てゝ、鎧につきたる塵打ち拂ひ、駒引き寄せ打ち

乘せ奉り、直實も共に馬に打ち乘り、暇乞して四五町ばかりは見送りしが、崩れ此の時後より味方の関の聲、誰ならんと見返せば、左手の方には成田平山控へたり、妻手の方には蒲殿佐々木、四ッ目の紋の旗を押したて、上の山には御大將九郎判官義經、白旗を靡かせ、膝元に取つては武藏坊辨慶、相摸龜井片岡伊勢駿河、源氏の一族聲々に、武藏の國の態谷は、敵と引組んで候ひしが、すでに組み敷さながら助くるは、必定逆臣と覺えたり、一心あらば直實共に打ち取れ

と、聲々に呼ばはれば、地直實も詮方なく、又も扇をあげて招ぎ寄せ、如何に若君あれを御覽候へ、如何にも助けまゐらせ度は思へども、中干味方の軍勢雲霞の如く充ち滿ちたり、地よもや逃させ給ふまじ、哀れ直實が手にかけ、後の御供養を營み、後世を吊ひ申すべしとありければ、敦盛は涙を流し、中干夫れ士は戰場にてはなき身と思へども、地此處を逃れ行く先にて、賤しき者の手にかゝり、中干面を曝さんも、平家末代までの恥辱なり、地箇程義理ある武士の手に羅り、死する生命は

惜しからぬ、中干早や首取れや熊谷と、地西に向ひて手を合はせ、覺悟極めておはします、流石剛氣の熊谷も、何處に太刀をあつべしとも思へず、心も亂れ氣もたえて、途方に暮れて居たりしが、斯くてはかなふべからずと、大干又も馬上にむづと組み、兩馬が間に引き下し、敦盛が花の首を、地水もたまらず打ち落す、さしもに猛き直實も、死骸に暫時は抱きつき、濱に伏してぞ歎きたまふ、されど又櫓番所の前なれば、漸々心を取り直し、御死骸を引き立て見るに、鎧の引合せ

左手の方には巻物一巻さゝれたり、妻手の方には漢竹の御笛扇を添へてさゝれたり、彼の巻物を披き見るに、平家累代の事悉く記し召れたり、やがて御死骸を葬り、御首笛巻物、漢竹の御笛扇を取り上げ、駒引き寄せ打ゝ乗り大音あげ、大干平家方母衣大將の其中に、無官の太夫敦盛を、武藏の國の住人篠黨の旗頭、熊谷次郎直實打ち取つたりと、凱歌を揑とあげ、陣所をさして引て行く、地やがて敦盛の首を、義經實見の其後は、直實に給はる、直實首を押し戴き、弓の絃

ふッと切り、太刀は素より弓矢を捨て、髻切つて武士を捨て、鎧の袖を墨に染め、地新黒谷に引きこもり、法念上人の弟子となり、其名も蓮生法師と様をかへ、三歳が程は夜もすがら、法華經百萬遍を唱へ、敦盛の追善を營みける、これも敦盛御最期の時に、一言の言葉のかはしもある故に、中干切り武士の情もあるぞかし、地何と聞いて唱へても憂きは世の中義理は熊谷、物の哀れを留めしは、無官の太夫敦盛に地て、諸事の哀を留めたり。

太田道灌

作者不詳

地　頃は彌生の末つ方、嘶く駒に鞍おかせ、士卒引きつれ道灌は、中干切り狩野
ーーー

中干 そは古歌の意をかりて、みのなきを花によそへて、答へしなりとて

地 一首の歌を詠じけり、

七重八重花は咲けども山吹の
みの一つだになきぞかなしき

地 斯く云々と事の由、具に申し上げゝれば、道灌いとゞ愧ぢらひて、

いざ是よりは山狩を、やめて詩歌をば學ばんと、中干切り終に詩歌に秀でたり、

地 されば人々心せよ、已れが業に鞭うちて、學びの道に勵なば、

中干 如何なる業かならざらむ、地勵めよ勉めよ國の爲め、切り勉めよ勵めよ國の爲め。

日本海々戰

作者不詳

地 明治三十八の年、頃しも皐月の末つ方、濛氣も深きあかつきに、濟州島の冲遙か、敵艦今や寄せ來ぬと、物見の艦の信號に、中干髀肉の歎を洩しつゝ、待ちに待つたる我軍は、天の與へと雀躍し、中干切り舳艫ふくんで錨拔く、大干御國の安危この一擧、懸りて我等大丈夫の、肩にある

ぞと奮ひ起つ、戰士の方の意氣高し、地荒ぶ風浪何のその、醜虜殲滅する迄は、再び生きて歸らじと、地勇氣凛々進む間に、正午も過て早

中干

や半時、霞める沖の島の邊に、煤煙一つ又二つ、次第に見ゆる數十條、旗艦スワローを始めとし、つゞく敵艦約四十、二列縱軍おごそかに、浪を蹴立てゝ進み來つ、崩れ◎やがて◎擊ち出す◎砲聲は、◎殷々◎轟々◎凄じく、◎砲◎煙◎天◎に◎漲◎りて、◎白◎日◎爲◎に◎光◎なし、◎奮◎戰◎こ◎に◎數◎時◎間、◎我◎が◎勇◎猛◎の◎奮◎擊◎に、◎今◎や◎亂◎る◎敵◎の◎陣、◎或◎は◎沈◎み◎又◎は◎燒◎け、◎殘◎るもの

◎は◎傷◎き◎て、◎戰◎鬪◎力◎も◎絶◎々◎に、◎遁◎れ◎兼◎ねてぞ見◎ゑ◎にける、地時しもあれや日は落ちて、夜色凄愴機熟し、襲ふ水雷驅逐艦、崩れ敵陣近く肉迫し、◎力◎の◎限◎追◎ひ◎擊◎てば、◎闇◎に◎紛◎れ◎て◎亂◎れ◎散◎る、◎秋◎の◎木◎の◎葉◎の◎夫◎の◎如◎、地東雲近くなりぬれば、中干逃れ後れし敵艦四隻、大干砲門摧け舵折れて、中干切り哀れや擧ぐる降伏旗、大干勇武絶倫名も高き、地敵師ロジエスト提督も、鬱陵島の島陰に、切り擒となりし淺ましさ、地苦辛慘憺幾月か、萬里の波濤を凌ぎつゝ、極遙に進み來し、中干彼の剛勇のバルヂクも、大和武夫に

敵し兼ね、目指す港を前に見て、沈みつ燒けつ奪はれつ、中干切り消えて哀れや水の泡、地山は青々水清き、秋津洲根に仇をなす、醜虜は如何に猛くとも、切り何どか敵せん大和魂、地やがて東海浪すさぶ、切り底の藻屑と消え果てむ。

松嚏

作者不詳

地新玉の、年立ち歸る春の日に、君が齡は千歳經る、松嚏とて數ならぬ、我等如きも許されて、切り聞くも中々面白や、大干皷は四海の波の音、中干笛は龍王の吟ずる聲、名も高砂の尉と姥、是れぞ盡きせぬ妹脊かや、地神の御前の鈴鹿山、惡魔を拂ふのみならず、弓矢の譽殘さし、田村麿の御威勢は、今が世までも楪葉の、注連引き廻す井筒より、汲めど盡きせぬ若水は、切り老を養ふ便かや、地扨て其の次は春の花、都に聞ゆる、三條の小鍛冶宗近は、心正直にして、神慮にかなひし名劍を作り出して、今太平の世とて、古き詩にもあるぞかし、大干長生殿の裏は春秋に富み、不老門の前には日月遲しと申せし事も、地皆其心を

ぞ學ばれて、今此御代と夕名げの、（切り）取々なれや梓弓、（地）矢猛心の一つだに、又剛の者の交はりは、（切り）頼みある中の酒宴かな。

春日野

作者不詳

（地）春日野の、下萌へ出づる若草の、歳の戸あけて秋津國、霞わたれる片岡に、（切り）月は殘りて雉子鳴く、（大干）明けの友鶴君が代の、（中干）壽ぎ祝ふ初聲に、（地）南山の、榮え久しき松竹の、落葉掻き取る諸人の、遊ぶ小川の菊の露、流れも匂ふ五百年の、齡を國にゆづる葉の、朝日輝く富士の峰、（切り）是れぞ蓬萊山とは謠ひつゝ、（地）七方の峰は影を湖水に浸し、木々の梢も荒磯の、（大干）月海上に浮びては、兎も走る浪の上、緑樹陰沈みては、魚木にのぼる風情かな、（地）五風十雨の御代の春、（中干）四海に靡く時津風、（地）君が治むる御代なれば、幾萬代までも變らぬ、（切り）御代てそ目出たけれ。

國船

作者不詳

（地）雲に聳へし高山も、登らばなどか越えざらむ、空を浸せる海原も、

切り——渡らば終に渡るべし、大干。我が蜻蛉洲は茜さす、東の海の離れ島、地例へば海のたゝ中に、浮べる船にさも似たり、中干二萬方里の船の中、四千餘萬の乘組あり、地船の主の指揮を受け、大干文明海に進み行く、地水主楫取の多かるに、我等も楫子の一人なり、船の行手は和田の原、八重の汐路の遠ければ、颶風逆まく時もあり、切り——高浪荒るゝ時もあり、地船手の業に習はずば、颶風高浪しのぎ得て、切り——思ふ港にいかで着くべき。

小督　高崎正風

地頃しも秋の半の空、詠め勝ちなる御袖の、涙の露を拂らはせたまひ、宿直に侍らふ彈正大弼仲國を召され、如何に仲國、切り——小督の行衛を知りたるか、大干内裏を逃れ出でしより、中干嵯峨野の邊にいさゝやかの、知邊に賴りてありと聞く、汝如何にもして尋ね出し、此文傳へよとの仰せなり、地仲國つく〳〵思ふ樣、嵯峨のわたりとばりにて、主の名をだに知らずして、尋ねん樣はなけれども、小督の殿は、世にも知られたる、琴の上手におはすれば、中干今宵最中の月影に、君の御上思

し出で、一曲をだに調べ給はぬ事はよもあらじ、兎にも角にも尋ね出でまゐらせて、叡慮を休め奉つらんと、心に思ひ定めつゝ、かしこまりぬと聞え上げ、やがて御前を罷り出で、寮の御馬に打ち乗りて、

中干 隈なき月に鞭をあげ、小鹿鳴くこの山里と詠じけん、嵯峨野の奥に別け入れば、きらめき渡る白露に、尾花が袖も打ち混り、鳴きかはしたる虫の音に、浮世の善悪も思はれて、獨り心を痛めつゝ、

地 家あることに立ち寄りて、

中干 問へども知る者更になし、

地 如何がはせん

と駒を立て、茫然としてありつるか、若し寶林院にて在するやと、

地 龜山近く至りしに、

中干 しづかき遙に聞えたり、

地 峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、とめつゝ行けば一と叢の、松の陰なる片折戸、内に聞きつる爪音を、手綱ゆるべてつくづくと、聞けば誠や月花の、御遊の宴に侍りて、笛の役つかまつりし時、聞覺へつる調にて、

中干 殊更曲は想夫戀、

地 扨は紛れもあらじとて、腰より横笛抜き出だし、すこし許り吹きならし、やがて駒より飛び下りて、門をほとゝ打ち

叩き、中干是は内裡より仲國、御使にまゐりたり、地明けさせ給へと訪ふに、琴ひきさし靜まりて、かへつて音もなし、やゝありていたひしげなる女房、門を細目に開け、顔ばかり差し出して、怪しの賤が伏せ庵に、内裏より御使など給はるべきにあらず、門違ひにや侍らんと云ふに、仲國なまじいに答しては、門とざゝれんと思ひければ、是非なく押しあけて中に入り、妻戸の椽に進み寄り、中干何とて斯かる處に御渡り候ふぞ、君には旦暮思ひに沈ませ給ひ、地つや〳〵供御も

聞し召さず、打ち解け御寢もならせ給はず、ほと〳〵御命も、御覺束なふこそ見え給へり、斯く申さば、上の空にや思さんと、御消息をば參らすれば、吟替あらなつかしやと、御文顔にあてたまひ、暫し言葉も泪あめ、晴れたる月も曇るらむ、仲國も、そゞろにせき來る涙をさへ、兎角慰めまゐらせつゝ、表の衣絞るばかりになりにけり、地やゝありて、御返り事引き結び、女房の裝束一と重、給はりければ肩にかけ、君にもさこそ待ち佗びておはすらめ、重ねて御迎へにま

ゐるべし、待たせ給へと云ひ捨てゝ、（中干切り）駒を早めて立ち歸り、（地）ありし次第を殘りなく、奏する程にほの〴〵と、秋の夜長も明けにけり、

（切り）秋の夜長も明けにけり。

吹雪の敵

作者不詳

（地）力山を拔き、氣世を蓋ふは、我が北門の鎭なる、（切り）歩兵第五聯隊なり、（大干）卍巴と降りしきる、（地）雪を馬前の塵と見て、（切り）拂ひつ進む二百餘騎、（干大）明治三十あまり五とせの、初月末の東雲に、鋒をたてたる霜柱、馬の蹄に蹴立てつゝ、向ふは何處雪の城、田代をさして急がるゝ、（地）後れ先き立つ世の人は、幸か不幸か辛畑を、過ぎてぞ來つる田母木野を、眞白に染めて大峠、小峠颪吹きまくる、（中干）吹雪の音は武士の、取りし弓弦の音の如、射出す白羽の雪の矢の、射拔かば射拔け我腕を、（地）氷の劍霜の鎗、突き貫かば突きて見よ、忠勇義烈の此の腹を、如何なる難苦も大君の、御爲と共に國の爲め、崩れ進め進めと下知するなる、劍光霜もかゞやきて、威風鋭き勇將の、下には弱卒あるべきぞ、渦

まき返す雪のあり、蹴るや吹雪の音凄く、霰の礫雪の丸、左手に拂ひ右手に受け、挑み戰ふ其中に、寒風骨や切れにけむ、凍傷破れ迸る、血汐に雪も色をかへ、ひるむ模樣もしばしにて、尙繰り出す雪の軍、幾重ともなく取り圍み、黑白も分かずなりけり、

地 猛虎におれぬ將卒も、終には休らふ燧山、燃さむ妻木も濡れ果てゝ、

中千 雪の露營に夜を更かし、假寢の夢も結び兼ね、明け行く空は猶白く、積れる雪は閉されつ、

地 安木の森も長森も、近しと聞けど乘る駒は、倒れ倒れて進みかね、無念やる方なくく、も、再びこゝに日は暮れぬ、

中千 起き出で見ればあな哀れ、篭深に立ちし矢の如く、髮は千筋に凍りつい、

地 眼を開き齒を嚙みて、あへなくなりし兵もあり、

國の爲め雪と戰ひ倒れても

功勳は高し陸奥の空

地 弓矢八幡神かけて、今日を限りの武運をも、守らせ給へ我は今、最後の隊伍整へて、亂れぬ列を世に止め、

大干 魔軍の圍み衝き破り、斃れ

て後に止まむのみ、來れと叫ぶ隊長は、滿身渾て膽ならん、中千斯かる時には我が軍紀、亂れはせねど自ら、後れし兵は忽ちに、崩雪の下に埋められ、進みし兵は崖に落ち、跡に附き添ふ下士卒が、頼み切つたる隊長も、紅蓮の氷に閉ぢられて、吟替呼吸さへ通はずなりければ、親に離れり雛鳥の、尾花打ち枯れし心地せり、腸凍りて死するとも、我が隊長は棄て難く、纏へる毛布脱ぎ取りて、屍にかけて下士卒の、心の中こそ健氣なれ、あはれ末期の際までも、身を忘れても忘れざる、忠義の道の一筋に、思ふ心の深ければ、雪千丈も猶淺く、中千切り八甲田山も猶低し、

風是如刀雪如矢　孤軍欲破苦寒圍
銀城一夜將星墜　二百雄魂呼不歸

地
嗚呼陸奥の第五聯隊、雪の魔軍と戰ひて、彼が包圍に落ちぬれど、
たてし偉勳は敷嶋の、中千日本心の花ならん、地綾に畏き大君は、御衣の袖をば絞らせて、慰問の臣を遣はされ、大丈夫なれや國民の、猛き

鑑と愛でましぬ、切り——たけき鑑と賞でましぬ。

威海衛

小田錦蛙

地 名も高き、渤海灣の咽喉なる、威海衛の戰ひに、我聯合艦隊司令官
伊東中將の、手足の如く率ゐたる、水雷艇の功績は、切り——聞くも勿々勇
————大干——ましや、敵の艦隊勇々しくも、威海衛の要害に、防材固く敷設して、
灣内深く潛みつゝ、戰ふさまも非ざれば、地 吾が聯合の艦隊は、朝の
雨雪に身を浴し、夕の風に梳り、たゞ遠近と取り卷きて、空しく時

日を過せしが、我が陸軍は日島と、劉公島を除く外、所々の砲臺攻
め取りたりと、信號の旗を見て、伊東司令官は、急に水雷艇隊の司
令を召し、中干水雷攻擊を命ずれば、地 藤田少佐今井大尉の各司令、姿勢
を正して申す樣、中干そは我々の望む所なれど、僅防材の切り目を目差、
暗礁多き海なれば、誓つて功は奏せんものゝ、水雷艇は悉く、再び
茲に歸るまじ、地 去らばとばかり立ち上り、誠忠面に見はれしを、司
令長官も坐ろに感じ、落す涙も國の爲め、中干——思ひ切つてぞ別れける、

夜も早や更けて月影は、威海衛の山に隱れ、黑白も分かぬ眞の闇、敵兵夢を結ぶ頃、崩れ我が水雷艇は、第三艇隊を先鋒に、百尺崖の此方より、浪を蹴つてぞ進みける、其勢は矢の如く、港灣内に衝き入れば、斥候の敵艦之を知り、信號の光きらめくや、灣内俄に騷ぎ立ち、打出す速射の砲丸は、雨か霰か降る中を、我が艇隊を物ともせず、忠義に身をや捨小舟、縱横無盡に馳せ廻る、第九號艇は素早く、巨艦間近に進み寄り、魚形水雷を發すれば、水煙一度に揺と上げ、命中の音、天地も裂けんばかりにて、艦隊半ばを沈めける、其翌けの夜も此處彼處に、水雷の音凄し、斯く金城鐵壁と頼みたる、旗艦定遠を始めとし、來遠威遠も沈められ、戰鬪力も盡きぬれば、丁提督は思ふやう、斯くなる上は是非もなし、兵士ばかりは助けんと、頃は明治の二十八、二月十二日の朝風に、靡くや力なく〳〵も、白旗たて〻降伏の、使節の船ぞ見えにける、武夫は物の哀れを知るとかや、伊東司令長官は、丁提督の請を容れ、聊心を慰めんと、

贈物をぞ遣はさる、丁提督は悄然として、吾事己に終りと、心靜に自害して、（中干切り）武士の道をぞ守りける、

百萬艨艟群似レ雲　旭旗所レ指絶ニ妖氛一
江流不滅英雄恨　空吊當年丁將軍

（吟替）嗚呼昨日までも今日迄も、清國に錚々たる北洋艦隊の司令官、丁汝昌とも仰がれし身の、斯くなり果つるは敵ながら、又〻得難き英雄の、末路の程こそ是非なけれ、（地）茲に威海衛を占領し、砲聲全く靜まれば、風雲忽ち一變し、（中干）威海衛の淵に渦卷きし、旗艦鎮遠を始めとし、濟遠平遠廣丙號、（地）其他砲艦數十艘、（中干）檣頭高く雨を呼び、雲を起せし黃龍も、大和劒に角を絶ち、忽ち旗は日の丸の、輝きわたる海軍旗、（地）君が御稜威は天が下、仰がぬものこそなかりけれ。

迷語もどき　古歌

（地）世の中は、迷ふが故に三界は暗し、一心悟れば、十方世界は廣くし

て、地獄の餓鬼も我にあり、中干切り——彌陀も淨土も他にあらず、大干佛とは、何を岩間の苔衣、中干唯其のまゝの姿にて、慈悲より外にしく心なし、地惟

世の中は、腹は立ちても言葉は殘せ、言葉少くすなはにして、濁る

心を澄やかに持ち、何れ人には情あれ、情は人の爲めならず、廻り

廻りて小車の、中干後は我身の爲めとなる、地左れば古人の言葉にも、聖

人は人を誹らず、仁者には敵なし、大干大海は塵を擇ばず、枝高きとて

風に脆きは、あだ折れぞする、中干惡まるゝ人には、猶能くしなへよ、

後には深き友となる、地身の善惡は、人の上にて我身を磨け、友は鏡

となるものぞかし、我が善きに、人の惡きはなきものよ、唯何事も

善惡と、思ふ心を捨てゝ見よ、中干切り——何所の里にも住みよかるべし、我智

我心、我力我慢を捨てゝ見よ、地頼む心は空蟬の、藻切り——拔け果てたる身

てそ安けれ。

狂女歌

古歌

地人間の世の有樣を、心に留めて案ずるに、一度は榮え一度は、又衰

ふる事もある、水も流れて水上に、中干切り又歸らぬが如くなり、大干祇園精舍の鐘の聲、諸行無常をあらはして、飛花落葉はまのあたり、地只徒に過ぐる身は、夢の中なる夢なれや、其古は我ながら、美人の姿人にも勝れ、餘寵の花と飾られて、今を盛りの花かつら、掛卷くも畏けなくも、我が君の、御身近くに仕はれて、中干月見花見の御遊の供、錦の褥玉の簾、明暮なせし身なれども、人一と盛り花一と時、地移つれば替る身の憂さを、其寵愛も枯々に、今憔悴と衰へて、唯何事も妹

脊の契り、淺衣の、薄き縁となり果て、中干切り哀れ果敢なき我身かな、地人生婦人の身となるなかれ、五十年過ぐるは夢の中、僅に百年の其中も、樂も苦みを他人によると、唐の白樂天が書きたる詩も、切り今身の上に知られけり、地哀れ只、吟替柴の折戸に人なくて、獨り涙に伏し沈む、耿々たる殘んの燈火、幽にして壁に添ひ、蕭々たる夜の雨の、窓を打つなる其音も、恨を添ふる媒となる、恨の數の重りて、地唐土までの思ひ草、哀れ貴きも賤きも、物思ふ身は異らず、流水同じ水

なれど、（中干切り）淵瀬と變る如くなり、（地）唯人間の、因果を廻る小車の、我が惡業に引かれ來て、（切り）斯かる浮身をや焦すらん。

那須野與市

作者不詳

（地）四國屋嶋の、荒磯の濱で、源氏平家の戰に、源氏方の弓矢の譽、（切り）今の世までも記さるゝ、（大干）左もあれば、平家方より、冲なる船に扇を的に立てけるが、（中干）兎にも角にも彼の的、射らでは叶はじと宣まへど、（地）冲に立ちたる的なれば、誰こそ御請致す者もなし、（干）爰に下野國

の住人、那須野與市宗高は、青年茲に十九歳、（中干）其頃名を得たる弓取なれば、心安く進み出で、御請いたし、（地）御前遙に引き下る、されば宗高其日の出立は、何時に勝れて花かに、緋縅の鎧着て、白檀磨きの脛當に、兵庫鎖の小手を貫き、五枚甲の緒を占め、小金造りの太刀を佩ぎ、年は五歳の眞黑名馬、梨地の鞍に錦繡の鐙、轡明鎭紫手綱、重籐の弓に切斑の矢を持ちて、波打際に駈け出でゝ、冲なる的を見渡せば、間十二町ばかりと打ち見えて、（中干）名殘の浪は音高く、

風は競ひて的定まらず、誠に射るに射られぬ次第なり、（中干切り）（地）されど又武士の、一度御請致せし上からは、兎にも角にも彼の的、射らでは かなふまじと、小松原へぞ駈け上り、駒より飛び下り兜を脱ぎ、那須王八幡伏し拝み、宗高祈願申すやう、（吟替）若も某七十五までの生命ならば六十五まで、六十五までの生命ならば五、五迄、五十五迄の生命ならば四十二して身命を縮め、何卒彼の的射らせ給へかしと、深く祈願を申しつゝ、（地）やがて那須王八幡聞召し、宗高が、二つ共なき露

の生命に引き返へて、祈る心の不憫とて、十二歩を的一と筋に、打ち守らせて有り難や、崩れ宗高直に駒引寄せ、打ち乗りて小松原を駈け下り、駒の手綱を掻繰て、海中に颯と駈け入り、浮きつ沈みつ一段ばかりは出でたりしが、駒逸物とは申せども、逆巻く浪にせかれつゝ、泳ぎ兼ねてぞ見えにける、斯くては叶ふべからずと、弓に矢を打ち番ひ、南無八幡大菩薩、此の的をはづさせ給ふなと、心に念じ能く引きて、矢聲を掛けて放ちければ、願の功力の御威光かな、要

月際よりふつと射切り、扇は空中へ舞ひ上る、地冲には平家舷を、叩いていと〻感じ入り、陸には源氏轡をならべ、切り籠を叩いて感せぬものはなかりける。切平家は敗軍と定まりて、中干源氏方三度の勝閧揑と上げければ、地痛はしや平家方は、皆思ひ〳〵に西國指して落ちて行く、中干切り心の中こそ不憫なれ、地宗高は外に功名數多あれど、斯程の功名は始めてにて、名を末代に殘し置く、切り源氏の御代こそ目出たけれ。

兒島高德

作者不詳

地元弘二年如月の、小雨しと〳〵笠置山、黑白も分かぬ夜の風に、さして行く手は楠の、中干切り蔭だに見えぬ常闇に、大干荒れわたりたり人面の、心は鬼か蛇の如き、妖怪變化の賊共は、恐れ多くも天皇の、御輿を西の隱岐國、地浪路遙に移しけり、其有樣は今も尙、史上に見るだに身の毛竪ち、腸さへも寸斷々々に、絕へ入る許りうるむ目に、切り古怨む外ぞなし、地其時兒島高德は、衆を集めて云へる樣、中干仁を爲す爲め、身を殺し、義を見てなすは勇なりと、勵す言葉勵む武士、地共々向ふ

舟阪の、山の險阻は是れやこれ、天の興へし要害と、身を潜めつゝ
堅唾呑み、我が大君を奪ひ奉らんと、待つに甲斐なき鳳輦は、早や
山陰に向ひぬと、聞くより早く杉阪の、中干樹の根岩角踏み碎き、望め
ば又も鳳輦は、遙に過ぎて後影、中干切り僅に拜むばかりなり、吟替今ぞ挫けし
兵士の、跡見送りて高徳は、天を睨むで地に哭し、姿を變へて身を
窶し、雨の晨も風の夜も、厭はず御跡慕ひつゝ、善き折ならば赤心
を我が天皇に聞え上げ、叡慮を休め奉らんと、氣の張る弓は撓まね

ども、守りきびしき板廂、隙さへ漏らさぬ御姿に、差足拔足日本刀、
櫻の老木かき削り、矢立の墨の黑々と、赤き心を書き下し、

天莫レ空ニ勾踐一　時非レ無ニ范蠡一

地

十字の文字は長城の、堅き固めや勤王の、記すも賊は文盲、群り見
るも明鴉、阿房々々と笑ふのみ、我大君は、龍顏いとも麗はしく、
暫しの間、愁の御眉、開かせ給ふも有難や、大干斯くの如くに高徳が、
虎の穴だも恐れなく、虎の子得んと思ひてし、勳は後の代々までも、

輝きわたりて曇りなき、中干明治の御代に愛國の、古きを尋ね新しく、護りの神とぞ崇めらる、地されば代の人心せよ、彼も人なり吾も人、食ふは今も古も、切り日本に實る瑞穂なり、地飲むは今も古も、切り清き日本の國の水、地卑屈の腸洗ひ去り、國を枕に誠忠の、切り樂しき夢や結ぶべし。

辨内侍

作者不詳

地哀れや落花情あるを、流水などか情なけむ、況んや中も芳野川、離れて世に棲む妹山や、脊山の嶺の月としも、暫時いざよふ程もなく、

あかぬ別の村時雨、切り曇りやすきぞ是非もなき、大干爰に河内守左衛門尉楠正行は、中干天下の安危を身一つに、地思ひあつめて三芳野や、芳野の宮に召され行く、頃は正平二年、師走の末の冬の空、嵐にきほふ木の葉にも、霰たばしる玉笹の、消えを爭ふ一族郎黨、中干引き具して急ぎ來つる石川や、大干何騷ぐらん群千鳥、鳴音亂るゝ彼方より、俄に響く人馬の矢叫び、地敵か味方か伏勢か、風に嘶く駒とめて、山下道を見渡せば、電光石火切り結ぶ、落花狼籍泣き叫ぶ、乙女の聲の玉ぎ

るは、必定曲者出でたりな、崩れいでや弱きを扶けやり、強きを挫きくれんづと、馬上の正行眞ッ先に、刀をかざして切つて入る、前より切りつ後より、突き貫きつ無二無三、當るを拂ひ逃るを追ひ、縱横無盡に薙ぎ立てし、掣電飛雷の早業の、其勢はさながらに、阿修羅王の荒れたるが如く、獸王獅子の狂へるに左も似たり、地野分の中の女郎花、思はぬ人に救はれて、思ふ人とはなりにける、其正行に守護されて、吉野の宮に歸り行く、中干辨の內侍の綾の袖、濡るは露か露

ならず、悲喜こもごもの涙なり、侍臣帝に奏すらく、中干逆賊高師直豫てしも、思ひをかけし辨內侍を、奪ひ取らんと企て、已に石川の邊にて、軍卒數多取り圍み、虎口危く見えけるを、ゆくりなくも正行が危難を救ひまゐらせて、事なく歸館召されけり、地傳奏斯くと聞し召し、帝は御簾を揭げさせ、汝正行なかりせば、いとも口惜しからましを、よくこそ助け計らひつれとて、內侍を正行に賜んと、詔して下されぬ、何思ひけん正行は、綸言いとも畏みて、

とても世に長らふべくもあらぬ身の

かりの契を如何で結ばむ

中干切り——と奏してこそは辭しにける、吟替あゝあぢきなの世の中や、身は是れ右少辨俊基が、忘れ形見の姫小松、花の匂はなけれども、操の色は深緑、結び給ひし妹と脊の、縁の糸の長かれと、祈りし甲斐も水の泡、消えなば消えねの心かや、時雨につらき松さへも、清き雪には色變る、習あるに君はそも、たゞ假初の契よと、言ひ捨てましゝ御心の、

其處には深き故あらん、地問はぬは辛し問ふは又、いとゞ耻かしとやしなん、斯くやと許りにとつむいつ、辨内侍は心から、戀路の闇に踏み迷ひ、今一度の逢瀬をと、中干後を慕ひて行き見しに、こはそも如何に、正行を始め百四十三人の郎黨は、かゝれとてしもなでざりし、其黒髪を切り捨てゝ、地如意輪堂に奉納し、扨正行が矢尻もて、堂の扉に留めたりし、辭世の痕を讀み見れば、

歸らじとかねて思へば梓弓

無き數に入る名をぞ留むる

偖は我夫正行君、斯かる覺悟のまし〳〵て、假の契を結ばじと、諭しましゝか夫としも、淺澤水のいと淺き、女心の悟り兼ね、つれなき君と葛の葉の、中干切り恨みしことの耻かしや、中干此の山寺の法の風、今の迷を吹きかへて、死なば未來は彼の國の、一つ蓮の花の上、地各留半座乘華臺、待我鬪浮同行人、短き假の契をば、長き誠の契りとも、結びかへたる嬉しさよ、帝の御爲め君の爲め、我が身も斯くや返し

せん、

大君に仕へまつるも今日よりは

心に染むる黒染の袖

誠しあらば心なき、中干切り空行く雲もたいよはん、地況んや正行木石にあらず、今や決死の出陣に、契らぬ妻の眞心を、身につまされて流石にも、斷腸の思やるせなく、中干不愍の者よ健氣なる、地我妻なれとそいろにも、鎧の袖を濡らしけり、切り鎧の袖を濡らしけり。

月花

古歌

地 月と花とは昔より、誰が樂まぬものやある、中干切り誰悅ばぬ人やある、大干さはさりながら月花も、地心につれて憂事の、切り種となれるも多からむ、

大干 足柄山の松風に、吹き合せたる簫の音も、是より遠く奥州に、軍となれば身の末は、死ぬるか生くるか白河の、關をば雲や隔つらん、

地 勿來の關の春の暮、駒を止めて眺むれば、都の空は花曇り、鎧の袖に散りかゝる、中干櫻の雪は將軍の、髻の霜より猶白し、地戟の枕に夜は

なれて、秋の哀れも知らざれど、中干越山月のいと白く、雲間を渡る雁が音も、都の空へ歸るぞと、地思へば我も懷しく、花の都は荒れ果てゝ、何處か我が身の置き處、中干今宵一夜の宿頼む、櫻の露に袖濡れて、

地 滅亡時に極まりし、切り平家の末ぞかなしけれ、大干佞人輩の讒により、諫めの言葉容れられず、二人ともなき賢人は、筑紫の浦の佗住居、御衣を拜して涙なる、心の底や如何ならむ、吟替我が君今は賊の爲め、遠き島地に行き給ふ、無念の心やる瀬なく、十字を記す櫻の木、地我が

赤心を申さんに、などか他言を要すべき、中月の光や花の香や、地幾萬年を經るとても、更に變りはなきなるに、常なきものは世の治亂、月を見て醉ひ花を見て、眠れる春の手枕の、只一場の夢の間に、移る興廢存亡の、中千切り世の成行ぞ無情なれ、地若しも世運拙くて、上には君を煩はし、下には民に苦勞かけ、國の亂るゝ其時は、月の光は輝くも、花の色香は匂ふとも、など樂のあるべきぞ、中千去れば世間の諸人よ、大千眞心こめて引き起し、地國の光を東海の、月よりも尙輝く、國の

譽を三芳野の、花よりも尙芳しく、中千するこそ今の勤なり、誓ふて斯くもなせし後、樂しき月見をして見たや、切り樂しき花見をして見たや、

蓬萊山

作者不詳

地目出たやな、君が惠みは久方の、長光閑き春の日に不老門を立ち出て、中千切り四方の景色を眺むれば、大千峰の小松に雛鶴住みて、谷の小川に龜遊ぶ、中千千代に八千代にさいれ石の、巖となりて苔の蒸す迄、地命ながらへて雨土塊を破らず、風枝を鳴らさずと云へば、切り又堯舜の御代も

斯やあらん、（地）斯程治まる御代なれば、千草萬木花咲き實り、五穀成就して、（大干）上には金殿樓閣の甕を並べ、下には民の竈厚くして、仁義正しき御代の春、蓬萊山とは是とかや、（地）君ケ代の、千歲の松も常盤色、替らぬ御代の例には、天長地久と、國も豊に治まりて、弓は袋に、（中干切り）劒は箱に納め置く、（地）諫鼓苔深うして、鳥も中々、（切り）驚く樣ぞなかりける。

新作琵琶歌終

大正三年一月二日印刷
大正三年一月七日發行

（定價金二十錢）
郵稅金四錢

著者　東京市本所區元町六番地　田邊春波
發行者　東京市神田區松住町五番地　高橋友太郎
印刷者　東京市神田區松住町五番地　菅井十一郎
印刷所　東京市本所區元町六番地　碇文社
發行所　東京市本所區元町六番地　江東書院
發賣所　東京市日本橋區若松町四番地　湯淺春江堂

不許複製

規子著
小説 ほととぎす

定價 金三十錢
郵稅 金四錢

花の如き美人喜美子は境遇の激變より浮川竹に身を沈め乍ら相思の正雄に心を濺ぎ漸くその妻となるも周圍の壓迫は遂に彼女を不幸の生涯に終らしむ悲哀なる物語を優婉洗練の筆致に描きたるもの

曲亭馬琴著
椿說弓張月 前編 後編

定價 金三十錢
郵稅 金四錢

本書を全二冊に別つ曲亭馬琴の名作弓張月は實に德川時代の精華たり彼の鎭西八郎爲朝が百尺竿頭に坐して動ぜざる勇氣有爲轉變の生涯は古今英雄の典型たり本書を讀めば枕頭索々の聲有り

高橋筑峰譯
少年日本外史

定價 金三十錢
郵稅 金四錢

有名なる頼山陽先生の日本外史は絶世不朽の名著たゝは世人既に知る所なり著者は多年の經驗に鑑み少年婦女子にも解り易きやう編述したる者なれば家庭の讀物として右に出づるものなからん

274
525

終